The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『ソーの舞踏会』小論
Author(s)	柏木, 隆雄
Citation	Gallia. 1992, 31, p. 110-119
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8130
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『ソーの舞踏会』小論

柏　木　隆　雄

I　はじめに

バルザックの短編『ソーの舞踏会』(1830) について，アンヌ・マリ・メナンジェは「19世紀前半の風俗の歴史，即ち『人間喜劇』がそこから展開することになる王政復古期の軋轢と変貌に関する歴史的・社会的反映の証言として，バルザックの作品の中で最も完成し，最も確固としたものの一つ」と述べた[1]。

たしかに，歴史の転換点の的確な描写を踏まえたルイ十八世を中心とする復古王政の内情，典型的旧貴族フォンテヌ伯爵が機略と計算によって当代的廷臣へと変貌する過程は，当時の宮廷の内幕や貴族のあり方を鮮やかに映し出す。とりわけ冒頭数頁，伯爵が，革命から帝政，そして王政復古，百日天下の騒乱の中に毅然として身を処し，やがて王の信任を得て次第に革命や戦乱によって失った財産や地位を回復，さらにその子女を王の後盾で，有力な一族と婚姻させる手際の叙述は，生き生きとして印象深い。

そのため，肝心の主人公エミリー・ド・フォンテヌとマクシミリアン・ロングヴィルの恋の経緯よりも，その父フォンテヌ伯爵をめぐる宮廷政治の表裏の方に小説の興味を見る者が少なくない[2]。執筆が七月革命に先立つ七ヵ月前であれば，作者の政治的・社会的視野がうかがわれるのは当然だろう。しかしこの作品の真の魅力はもっとほかにあるのではないか。

小説は最初『ソーの舞踏会あるいは貴族院議員』という題であった[3]。勃興す

1) Anne-Marie Meininger, *Introduction* au *Bal de Sceaux* in *La Comédie humaine*, éd. Pléiade, 1976, tome I, p. 97. 以下，『ソーの舞踏会』の引用はこの版を用い，*CH.* I, P. 97 のように表記する。

2) P. -G. Castex はこの小説が「バルザックの政治原理を最もはっきりした形で示すもの」と述べ (*Introduction* au *Bal de Sceaux*, éd. Classiques Garnier, 1963, p. 112)，ヒロインの影の薄さは，加藤尚宏「『ソーの舞踏会』(バルザック) エミリーについて」〔『佛蘭西文藝』第13号，1988〕においても指摘されている。

3) 二巻本初版『私生活情景』(1830) の第一巻末に，*Le Bal de Sceaux ou le pair de France* と題され，その第二版では *Le Bal de Sceaux* だけとなる。Cf. "Histoire de texte" in *CH.* I, p. 1209.

るブルジョワ階級とその権威の基盤を失いつつある貴族階級の二つの対立する概念が並んでいたわけである。というのもソー Sceaux はパリから南10kmほどにある町で，かの蔵相コルベール以来貴族の所有であったその地の豪壮な邸宅跡を，革命後当時のソー市長デグランジュが有志と計ってその庭園を購入，住人の散策地とした。ここで行われる野外舞踏会が「ソーの舞踏会」として有名となったものであるからである。

貴族・ブルジョワ入り交じって踊るソーの舞踏会と1814年王政復古になって新しく制度化された旧勢力を代表する「貴族院議員」[4]とを対に並べる初版のタイトルは，したがってグラン＝カルトレの言う[5]「1815年から1830年までは二つの画然とした社会となる。王を取り巻く上流社会とあらゆる階層のブルジョワと民衆を一体とした国民の」図式をそのまま表すことになるだろう。

その「あるいは貴族院議員」という副題（または添え書き）が第二版から消えて，単に『ソーの舞踏会』だけとなるのはなぜか。もちろん最初「貴族院議員」と付け加えたのは，エミリーが結婚相手として固執する条件を明示し，同時に時代を映す意図があったのだろう。初版の *le Bal de Sceaux ou le pair de France* の "ou" は，単なる併置と取れるが，またヒロインのブルジョワか貴族かの選択を含意しているとも読める。二版以降，「あるいは貴族院議員」が外されたのは，社会的状況や，ヒロインの選択よりも，「ソーの舞踏会」のロマネスクな面に重きを置いたためではないか。なるほどメナンジエの言うように「王政復古期の軋轢と変貌に関する，歴史的・社会的反映の証言」には違いないが，それにもまして「小説」として読まれることを欲したのではなかろうか。

われわれは小説の魅力の検討を，その題名となっているソーの舞踏会の場面から始めたい。

II　妙味ある混交——ソーの舞踏会——

「貴族というものへの信仰を断じて変えず，ひたすらその格律に従うことによって，旗幟鮮明にせねばならぬ際の処世とした」[6]フォンテヌ伯爵，その鍾

---

4)　Pair de France は本来旧制度下の相当の権威をもつ大貴族を指したが革命で廃止され，王政復古に際して，英国の上院議員に範を取り，世襲財産の多寡や王への忠勤で選ばれた（1815年８月19日の勅令で世襲となる）。Député（代議士）は40才以上で，相当の土地資産と動産が必要だが，貴族院議員は25才でなれ，30才から議決権を得た。定数は1815年は68人だったが，漸次増え1830年には384人に達した。

5)　John Grand-Carteret, *XIXe siècle (en France) Classes-Moeurs-Usages Costumes-Inventions*, Firmin-Didot, 1893, p. 113.

6)　*CH.* I, p. 109.

愛を一身に集め，むしろ父以上に貴族至上主義となった末娘エミリーは，父伯爵が舞踏会にかこつけて若いエリートを屋敷に集めても，足が太いの，近眼だの，男の名が嫌だのと退け，ひたすら「貴族院議員か，その長男」を結婚の相手に望む。

夏の一日，彼女はブルジョワ出身の義兄が別荘を所有するソーに赴いた。「平民は軽蔑していたが，その気持はブルジョワが積んだ富を利用する段には作用しなかった」[7]のである。その町の名を高からしめた舞踏会は，きわめてブルジョワ的であった。そこには，

> ひょっとして上流社会の女性に出会い，見初められるかもしれないという期待や，判事以上に狡猾な百姓娘と出会うというまだしも叶いそうな期待から，日曜日になるとソーの舞踏会へたくさんの代訴人の書記やエスキュラプの徒，パリの店の奥の湿った空気で蒼白く，陽に当たらぬ色艶の若者の群れが駆けつけてくる[8]。

いずれ代訴人とか医者とか商人とか，やがて大ブルジョワジーに成り上がる可能性のある若者が上流社会への入り口とするこの舞踏場の「妙味ある混交」[9]こそが，身分，階級の入り交じるソーの舞踏会の特徴である。その舞踏会に，誇り高い大貴族志向のエミリーが，ソーに来てまず第一に興味を示す。

> エミリーは，誰よりも先に，下々の風にならって，その陽気な舞踏会に行きたい，と宣言した[10]。

「下々の風にならう」とは，いかにも高慢なお嬢様らしい。しかしこの言葉は，先の「判事よりも狡猾な百姓娘」の表現と重なりはしないか。彼女の意識下に，身分低い百姓娘となって身分の高い紳士を魅惑する期待があることを疑わせる。父フォンテヌ伯爵は貴族院議員にして「裁判所長官」であった。「判事よりも狡猾な百姓娘」の文字は意味深長となる。貴族の娘は百姓娘と同じレヴェルにあり，ブルジョワの若者と同様「出会い」を期待する事実がそこに隠されていると取れないことはない。果たしてエミリーはそこで運命的な出会いをするのである。

> この高慢な人間は突然この広い野原に一本の花に出会った。（略）フォ

---

7) *Ibid.*, p. 132.
8) *Ibid.*, p. 133.
9) "Cette intéressante mêlée rendait alors le bal de Sceaux plus piquant . . ." *Ibid.*, p. 133.
10) *Ibid.*, p. 133.

ンテヌ嬢は一人の青年に彼女が長い間夢見てきた外見の完璧なタイプを認めたのだった[11]。

エミリーは一目でこの青年の尋常ならざる風姿に打たれた。しかし，彼は貴族院議員か，あるいはその長男であるのかどうか。彼女は翌日から乗馬を口実に青年の姿を求めて近郊を散歩したり，舞踏会に何度も足を運ぶが，彼と出会うことがない。伯父のケルガルエ伯爵が姪のために一計を案じて，彼の名前と住まいを聞き出し，エミリーが宿る別荘に彼を招待する。エミリーは，彼が貴族であり，貴族である限りは貴族院議員であると信じた。踊りに来たものが貴族かブルジョワか判然としないところがソーの舞踏場の特色である。ブルジョワが結構優雅に貴族はだしに踊り，農家の娘が礼儀正しく振舞うのを見て，初めて出かけたエミリーも驚いたではないか。「ソーの舞踏会」という「妙味ある混交」の場は，こうして小説の前半に強調された貴族至上の世界を，舞踏の輪の中に崩していく。

III　ヒーローの登場

未知の青年は，マクシミリアン・ロングヴィルと名乗った。彼が登場の初めから殆ど理想的な人物とされることは注意してよい。その形容を列挙すれば「非常に立派な物腰」，「貴族的な」「育ちのいい青年」「完璧な紳士としての十全な知識」「不死鳥」「簡素でしかも粋な態度，悠容せまらざる物腰，優しく，涼やかな声音」，「輝かしい学歴と知識は，堅固にして広範囲にわたっていた」となる。つまり全てにおいて最上級。それはエミリーが彼に「天上の人」という評価を下すにいたって決定的なものとなる[12]。もっとも，青年が辞去してすぐ伯爵が「あれは抜け目のない男だ」と言うが，悪意ではなく，その賢明さを反語的に表現したものであろう。

しかし，この言葉はエミリーがマクシミリアンを賛嘆する直前におかれて，絶妙の効果をあげる。宮廷の駆け引きで知られたその伯爵の「抜け目ない男」の評で，あまりにも理想的な彼の姿に多少の留保がつくからである。

非のうちどころのない属性にもかかわらず，依然としてマクシミリアンが貴族かどうか明らかでない。重なる訪問につれて示される「思いがけない控え目で謙遜な態度」は，彼に複雑な秘密の有無を疑わせる。

エミリーがたくみに会話のなかに種をまいたり，彼自身の様々な詳細を

11)　*Ibid.*, p. 134.
12)　*Ibid.*, pp. 144-145.

彼から引き出そうと罠をしかけても，その男は秘密を隠そうとする外交官のように器用に話題をそらす術を心得ていた[13]。

絵画，音楽，乗馬，射撃にも堪能で，しかもそれをどこで習ったかを問われても明らかにしようとしない。しかしエミリーは自分がその青年を愛していることを自覚し，また彼からも愛されていることを確信する。

一度ならず，青年とフォンテヌ嬢は二人きりで庭園の小径を散歩した。あたりの自然は舞踏会に出かけようとする女のように綺羅を飾っている。一度ならず，彼らはとりとめもなく話をしたが，そのまったく空疎な言葉の端々にも，深い感情が隠されていた。二人はしばしば一緒に落日を眺め，その豊かな色彩にうっとりした。ヒナゲシを摘んでは花びらを散らして恋の行方を占い，ペルゴレスやロッシニが見出した調べを情熱に満ちた二重唱で一緒に歌っては，二人の心の秘密をしっかりと代弁させた[14]。

典型的にロマンチックな装置の下，一対の恋人の姿が描き出されるが，「空疎な言葉」といい，「占い」といい，「歌」といい，「深い感情」を隠しながら，いずれも模糊とした謎に通じるものだ。恋の舞台となる自然が「舞踏会に出かける女」に譬えられるのは，エミリーの恋の行方に「舞踏会」がいかに重要な役割を果すかを示すだろう。この場面に続けて，マクシミリアン兄妹をエミリーが別荘の舞踏会に招待する展開は実に印象的だ。

舞踏会の日がやって来た。クララ・ロングヴィルとその兄を，従僕たちは，几帳面に貴族の称号を示すドをつけて呼んで，二人は一座の花形となった。生まれて初めてフォンテヌ嬢は若い女性としての勝利感を味わって喜んだ[15]。

ロングヴィルは貴族か，ブルジョワか。そこに『ソーの舞踏会』の興味の鍵がある。エミリーの期待を承知して，従僕たちはロングヴィルにドをつけて呼んだにすぎない。エミリーは何が何でも気になる一事を確かめねばならぬ。ここで，エミリーがその登場以来ひたすら「知ること」に執着してきたことに気がつくだろう。外国語も，文学も，音楽も，宮廷の政治さえも，彼女は常にそれを知らずにはおかずにきたはずだ。自らの「知の優越」を誇るエミリーは，ロングヴィルが貴族かブルジョワかを，今こそ知らねばならない。

13) *Ibid.*, pp. 146. 彼は「神秘の魅惑を保つように巧みに話をそらせた」ともある。p. 147.
14) *Ibid.*, pp. 147-8.
15) *Ibid.*, p. 148.

IV 「知ること」と「愛する」こと

エミリーは，マクシミリアンの妹クララから情報を得ようとする。兄同様いっこうに正体を明かさない彼女は，逆にこう答える。

> 「お嬢様，私はずいぶん聞かされましたわ，マクシミリアンがあなたについて話すのを。だから私，ぜひともあなたに直にお会いしてどんな方か知りたいと思っていましたの，兄のためにも。だってあなたを知りたい，っていうことは，あなたを好きになりたい，ということじゃありません？」[16)]

たしかに，「知りたいことは，愛したいということ」である。この言葉は，クララよりも，エミリーにふさわしい。なぜなら，エミリーはたしかに「知りたい」。マクシミリアンの「人」ではなく，その「身分」を。それを「知れば」愛することができるのだ！

彼女は平民を罵ったあと，クララに自分たちが同じ階級の人間であることの保証を引き出すための問答を試みて，「いまどき，そんな議論はたいしたことはありませんわ。」とかわされてしまう。エミリーは，この答えを肯定的に受け取った。その態度，物腰，マクシミリアンが貴族でないことがあろうか。二人は舞踏会のすべての視線を浴びて踊る。

ケルガルエ伯爵が彼らを「顕微鏡で昆虫を観察するように」眺めている，とあることに注意しよう[17)]。エミリーは，マクシミリアンの「種属」を知ることに必死であった。彼は彼で彼女の実像を知ろうとする。知る，という一点に恋の成否はかかっている。その知の相互の主体と客体が，じつは，さらに，もう一つの目の「知る対象」でもあることをこの一行は示しているのである。

この「知のゲーム」は，ソーを発つに際して，エミリーがマクシミリアンに「知りたい」肝心の点を問う最後の試みで緊張を増す。彼を待ちながら，庭園のベンチで自分の確信を確認するエミリーと，物思いにふける彼女を眺めるマクシミリアン。折からのロマンチックな落日の光景が，エミリーに決定的な状況を作り出し，長い沈黙の後，ついに彼女は「あなたは貴族なのか？」と問いかける。

> エミリーにとって恐ろしい沈黙が，今ほとんど途切れ途切れに発した言

---

16) *Ibid.*, p. 148.
17) *Ibid.*, p. 149.

葉に続いた。その静寂が続く間，この誇り高い娘は，自分の愛する男の燃えるような視線に耐えられなかった。というのも，彼女は続いての言葉を密かに卑しいと感じていたのだ。「あなたは貴族でいらっしゃるの？」

この最後の言葉が発せられた時，彼女は湖の底にでもいたいと思った。「お嬢さん」と重々しくロングヴィルが答えた。顔色が変わって，一種厳しい威厳が示されていた。「私は遠回しにではなくお尋ねにお答えすることをあなたに約束します，あなたがこれから私のお尋ねすることに誠実にお答え下さったら，すぐ。」[18]

エミリーの姓はフォンテヌ，「泉」である。彼女は「湖の底にでもいたいと思った」とあるが，貴族を証する冠詞 de がつけば，「泉から」ともなる。それに答える彼が，ここではマクシミリアンでなく，姓のロングヴィルと表現されることは意味深い。貴族か否かの問いを発した女の家名「泉」が，「湖」の語から連想され，湖，泉二つながらの冷たく，奥深い，重いイメージに女を沈める[19]。男も姓で表されるが，貴族の冠詞は付かない。彼の顔の「重く」「威厳のある」真剣な様こそマクシミリアンの誇る家柄なのだ[20]。

マクシミリアンは，近々大きな財産が手に入る見込みがあるとエミリーに明かす。二人には相手に敢えて口にしえない事柄があった。エミリーは男の身分をはっきり問えず，マクシミリアンは，自己の投機を明らかにできない。貴族とブルジョワの生き方がそこに画然と示される。マクシミリアンは女の愛を信じて投機の事実を明かし，エミリーは男の毅然とした姿に，貴族と確信する。しかしそれはただ信じたにすぎない。

V 「既知」と「未知」の深淵

マクシミリアンへの一層の愛と期待を抱いて家に戻ってきたエミリーを待っていたのは，父伯爵の「あの青年はまったく素性が知れない」という言葉であった。「知る」ことを欲して，あえて問い，やっと「知った」はずのマクシミリアンは，再び「未知」，しかも「まったく素性が知れない」者へと引き戻される。「未知のマクシミリアン」は，エミリーが，晩秋の一日，義姉たちと

18) *Ibid.*, pp. 152-3.

19) Castex は Emilie の造形を La Fontaine の『寓話』中の *La Fille* からヒントを得たか，と推測している (*Op. cit.*, PP. 106-107)。ヒロインの姓を Fontaine として，作者はその連想を暗示したのか。

20) ケルガルエ伯爵が借金の有無を尋ねた時，マクシミリアンは皆無と答え，さもなければ "tout crédit et toute espèce de considération" を失うとしたところにも彼のブルジョワとしてのアイデンティティが示されている。(*CH.* I, p. 143)

パリのとある店で彼を見出す時，別荘に現れた折と同じ “bel inconnu”「見知らぬ美男」と表現される。「卑しい商人」姿の彼は，エミリーには「未知」の者でしかない。

意味深いのは「既知」と「未知」の間にゆれるエミリーの確認のドラマが，ナポリ大使の開催する舞踏会で進展することだ。彼女が一人の外交官と踊ると，それはマクシミリアンの兄であった。自分を「知っているか」と問うエミリーに，彼は「誰の口にも上る名前さえ覚えていない」と答える。舞踏会の名花エミリーも，この男には，未知の女性にすぎない。この匿名性に隠れて，彼女は「知っていて」しかも結局は「素性の知れぬ」マクシミリアンのもう一つの姿を知る。父の意向で財産の一切を兄に譲った彼は，エミリーに明かした投機の成功で財をなしていたのだ。

マクシミリアンをめぐって，エミリーに「知ること」の深淵をのぞかせるのが，情報の真偽に最も敏感であるべき外交官であることは象徴的だ。結婚の相手をすべてその「外観」によって「知った」として退けてきた彼女の悲劇は，ここにおいて頂点に達する。

マクシミリアンは，その時貴夫人たちと話していた。エミリーは傍らの椅子に座って聞き耳を立てる。話題は「真実の愛」である。二人のかつての話題を，わざと彼は口にしたのだった。男はイタリーに赴くことを語る。女に「真実の愛」があるなら彼女は同行するだろう。エミリーはついにその謎を解くことができない。男の真意を「知る」ことがなかったのである。彼は恋人の愛に賭けた。女は自己の魅力にかけて，彼は出発しまいと信じた。真に知ることのないエミリーの悲劇。二人の会話は，話者の真実を知る術が競われる点で，まさしく外交の術であり，宮廷の駆け引きでもある[21]。ナポリの大使の邸で開かれる舞踏会ほどその舞台にふさわしいものはなかろう。

小説のタイトルを『ソーの舞踏会』とだけした意味はいまや明らかだ。彼女の恋は，ソーの舞踏会において花開き，ソーにおける最後の舞踏会で頂点に達し，ナポリの大使の舞踏会で決定的な破局を迎える。ソーでは，民衆，貴族，ブルジョワいずれも入り交じって舞踏に興じた。身分，門閥に最も敏感である筈のエミリーが，その舞踏会で恋を得，特権階級の集まりであるナポリ大使の舞踏会でそれを失うのは皮肉というほかない。

---

21) マクシミリアンが「その秘密を隠しおおせる外交官のような巧みさ」の持ち主であることや，「それぞれ，恋するときには相手をできるだけ研究しあうように，おたがい研究しあった」（*CH.* I, P. 149）とあったことを思い出そう。

VI 結び 「知」のカドリール

こうしたエミリーの運命を見れば，『ソーの舞踏会』の構造そのものが，きわめて巧妙に作られていることがわかる。前半，父フォンテヌ伯爵の廷臣としての経歴が，なぜ若い娘がヒロインである恋物語の中で長々とと語られていたのか。伯爵は最も古い家柄を誇る貴族で，妻も古いブルターニュの貴族から娶った。もとより，これはやがて登場するマクシミリアンが新興のブルジョワ階級であることとの効果的な対比であろう。しかし，フォンテヌ伯爵は，「計算高いヴァンデ党」でもあったはずだ[22]。打算や，投機的な思惑に乏しいわけではない，むしろきわめてブルジョワに近い精神でいることを見逃してはならない。彼が王の信任をえて代議士となると，「口はほとんどきかず，多くを聞いて，豹変した」[23]のは，彼が「知る」術をよく心得ていたことを示している。自らをいささか韜晦することによって，その繊細さ，如才無さを発揮し，利益を得る，その点で伯爵はマクシミリアンと通底するのである。

物語の結末は，そのことを明らかに示して鮮烈きわまりない。貴族院議員ならざるマクシミリアンをあきらめて，エミリーは結局伯父のケルガルエ老伯爵と結婚，彼の昔話に耳を傾け，サロンでの客相手の生活を送る。そのエミリーの前にマクシミリアンが現れる。折しもカードに興じていた彼女は，彼が貴族院議員になったと聞き，うっかり切り札のハートのキングを除いて負けるのだ。ハートのキング（心の王とも読める）を，自ら遠ざけて勝負を失った女の見事な寓意がそこにある。

炯眼な読者は，フォンテヌ伯爵とルイ18世の会話を思い起こすだろう。伯爵は「明敏にも王から賜る寵愛に驕ることなく，王の喜ぶやり方であしらう術を心得ていた。」[24] ルイ18世と伯爵との二人の利害をめぐる二回の「機知の応酬」[25]は，フォンテヌ伯爵の巧緻をはっきりと印象づけている。

エミリーとマクシミリアンが交わしたきわめて重大な会話の場面を思い起こそう。一つはエミリーが彼の出自を問うた時の決然として，しかも曖昧な彼の返事であり，いま一つはナポリ大使邸の舞踏会での応酬である。いずれもエミリーの将来を左右するきわめて意味深いものであった。しかし，父伯爵と違って，彼女はついに相手の真意を洞察することができない。新しく勃興する富裕

---

22) *CH.* I, p. 110.
23) *Ibid.*, p. 112.
24) *Ibid.*, p. 113.
25) Cf. *Ibid.*, p. 112 et p. 114.

階層のマクシミリアンを捉え損ねて，旧貴族・旧世代の伯父，老ケルガルエ伯爵と結婚するエミリーの悲劇はそこにある。小説は，現実のキングの真意を計ってその恩顧を確実なものにした父親とは異なり，「ハートのキング」を「無知」ゆえに遠ざけたエミリーの失敗の人生を見事に暗示して終わる。『ソーの舞踏会』の Sceaux が国王の御璽をも意味することを知れば，このタイトルの意味深さが知れよう。

物語の発端，あれほども紙数を費やして父親に充てられていた皮肉の巧みさ，辛辣な弁舌，機略とセンスは，末娘の登場とともに，彼女が縦横に駆使するところとなり，彼女をサロンの女王とした。しかし本質を見抜けぬ「知力」はついに後悔のほぞを噛む。物語は舞踏会さながらカドリールのように相手が入れ代わって，めくるめく人生のそれぞれの浮沈を鮮やかに写して遺憾がない。

(D. 1975　大阪大学教授)